

南半球、オーストラリアの最東端に位置するバイロンベイは、美しい海岸線と自然に囲まれたリゾート地で、ブリスベンから車で1時間半ほど南に下った場所に位置している。成田空港からブリスベン行きの夜間便に乗ると早朝には到着し、時差も2時間のため、時差ボケの心配もない。街の中心地から車で10分程度走ると、さすがオーストラリアと感じさせる広い牧場に出る。1ヘクタールに牛1頭、いやもつと広いだろう。牧場に囲まれた丘を登ると、そこには世界中の養蜂家から注目されているフローハイブ社がある。1852年にラングストロース式の巣箱（現在主流の巣箱）が発明されて以来の養蜂技術のイノベーションだと言われているフローハイブは、防護服の着用や煙を炊く必要がなく、巣箱も開けずに蜂蜜が収穫できる。私たちは日本の気候風土や養蜂環境に適した巣箱の改良を加え、その使用方法の研究と技術の普及啓発を図るため全国20か所で実証飼育をはじめた。この技術が普及することで、採蜜作業における労働量軽減と作業者の安全性向上が図られ、養蜂業の働き方改革が期待されている。今回の訪問にはニホンミツバチの飼育調査の共同研究パートナー東京大学大学院農学生命科学研究科准教授の宮沢佳恵先生と博士課程で調査を担当している石井マリア氏も同行した。

フローハイブを発明したのは、スチュアート・アンダーソン氏とシダー・アン

# フローハイブ開発者を訪ね オーストラリアの最東端へ

NPO法人銀座ミツバチプロジェクト 最高顧問 高安和夫

ミツバチ目線で緑の街を③



バイロンベイのフローハイブ社にて。2列目に開発者のスチュアート、シダー親子（前列左から2人目が高安氏）

ダーソン氏の親子。アンダーソン家は3代続く養蜂一家である。6歳のころから養蜂を始めたシダーはミツバチに刺されることにうんざりしていた。刺された人は痛いし腫れるだけでなく、刺したミツバチも死んでしまうからだ。そこで「ミツバチにストレスを与えないで蜂蜜を収穫する方法がないか」考えはじめた。スチュアートとシダーは、議論してはスケッチを描き、その後、プロトタイプの実験飼育を繰り返した。そして10年の試行錯誤を経て、ついにプラスチックの巣枠を使用し、六角形の巣房を半分スライドさせることで

蜂蜜が溢れでる技術に行きついた。昨年、春に続き2度目のフローハイブ社への訪問。笑顔で迎えてくれたスチュアートとは初顔合わせだが、息子のシダー、販売担当のベッティーナやエミリーとは懐かしい再会である。丘の上の一軒家を改装したオフィスのテラスからはタスマニア海まで見渡せる。時には沖を泳ぐクジラも見られるそうだ。そして庭に並ぶのはカラフルな赤や青、黄に屋根をペイントしたフローハイブ巣箱である。

スチュアートの案内で庭に出る。事前に飼育方法や巣箱についての疑問点を投げかけていたので巣枠を取出して丁寧に解説してくれた。お陰で誤解が解けた。フローハイブは誰でも簡単にミツバチが飼える技術ではなく、ミツバチ飼育の基礎知識が必要で、なおかつフローハイブの特性を十分理解しないと期待どおりの収穫がないばかりか、群を崩壊させてしまう。発売から3年が経過し海外では人気の巣箱が日本で普及しない理由が、どうやらそこにありそうだ。

私たちはフローハイブを使った飼育指導と日本での普及を約束してオーストラリアを後にした。

## 事業紹介

NPO法人銀座ミツバチプロジェクトは、2006年3月から銀座のビルの屋上でミツバチ飼育を開始。ホテル、レストラン、百貨店など銀座の老舗と連携したハチミツ商品づくりや屋上緑化、地域の生産者との交流事業を通して街の活性化に貢献。平成22年6月環境大臣表彰。平成24年4月農林水産大臣より「食と地位の『絆』づくり」選定を受ける。